

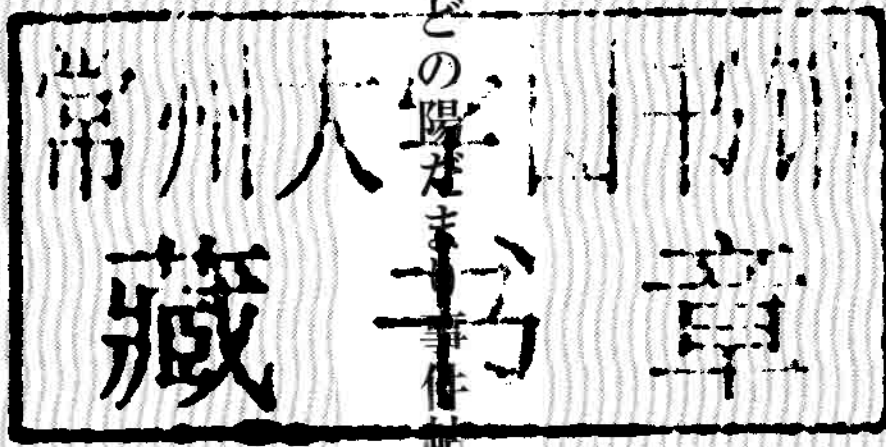
森山茂里

婿どの陽だまり事件帖

密書



密書



婿どの陽さま事件帖

森山 茂里

学研M文庫

みっ しよ むこ ひ じ けんちょう
密 書 婿どの陽だまり事件帖

もりやま しげり
森山 茂里

学研M文庫

2012年11月27日 初版発行



発行人——協谷典利

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Shigeri Moriyama 2012 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター『婿どの陽だまり事件帖』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター TEL 03-3401-2382

<http://www.jrrc.or.jp> E-mail: jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓒ〈日本複製権センター委託出版物〉

目次

序	5
第一章 帰ってきた男	8
第二章 密書	56
第三章 襲撃	103
第四章 疑惑	160
第五章 策略	205
第六章 死闘	244

密書
婿どの陽だまり事件帖

森山 茂里

学研M文庫

目次

序	5
第一章 帰ってきた男	8
第二章 密書	56
第三章 襲撃	103
第四章 疑惑	160
第五章 策略	205
第六章 死闘	244

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

序

雨が強く地面に打ちつけていた。

大工の見習いの半助^{はんすけ}は、脱いだ下駄^{ふところ}を懷に突っ込んで鎌倉河岸^{かまくらがし}の土手を走っていた。このにわか雨で土手の上も、左手の往来も人の姿はない。河岸向こうの大名屋敷の白い漆喰^{しつくい}塀も雨に煙っている。

桜の大樹の下に雨宿りして、やっと一息ついた。枝葉を広げた桜の木の下で、雨をぐっしりと吸った着物の裾や袂^{たもと}を絞っていると、雨音の向こうから怒号が聞こえてきた。

半助は声のした方に眼をやった。土手下の草地で二人の武士が向き合っていた。

一人は旅姿の武士で、今一人は深編笠^{いぶか}の武士だった。

この雨の中を……。半助は訝^{いぶか}しく思った。

離れた所から見ても、二人の様子がただならぬのがわかる。

「謀^{たばか}ったな——」

旅姿の武士が怒声をあげた。

次の刹那^{せつな}、二人はほとんど同時に腰の刀を抜いた。

半助は息を吞んだ。あつという間に二人は刃を交えた。行き違つたまま、しばし動かなかつた。数瞬の後、旅姿の武士がゆつくりと前のめりに倒れた。

深編笠の武士が血振りをして刀を納めると、倒れた男の上に身を屈めて懷を探っていた。

半助は膝がぐくぐくした。木の幹にすがりつきながらも土手の光景から目が離せなかつた。その時、深編笠の武士が顔を上げた。半助の掴^{つか}まっている桜の木を見上げた。

逃げようにも、足がすくんで動けない。悲鳴をあげようにも、舌がもつれて声が出ない。自分も斬られるという恐怖で頭も身体も凍りついていた。

深編笠の武士は、半助を斬りに来なかつた。刀を鞘^{さや}に納めると、素早くその場を立ち去つた。

（助かつた……）

半助は安堵から足元のぬかるみにへたへたと座り込んだ。深編笠の武士の姿が雨煙の向こうに消えると、半助はぬかるみからようやく立ち上がった。震える足で土手を下り、恐る恐る斬られた武士の側に近づいた。

旅姿の武士は、刀を握ったまま水溜りに顔を突っ込んでうつ伏せに倒れていた。武士の身体の下から流れ出す血が泥水と混ざって辺りに広がっていた。確かめるまでもなく、事切れているのは明らかだ。

「た、大変だ——」

突如、声が口を衝いて出た。半助は自分の声に弾かれたように、雨の中を走り出した。途中のぬかるみで足を滑らせて、何度か転びながらも、無我夢中で走った。

どこをどう走っているのかわからなかった。

気がつくと、泥まみれになって目についた自身番に駆け込んでいた。

第一章 帰ってきた男

一

浩之^{ひろのしん}は屋根の庇^{ひさし}にかけた梯子^{はしご}に上ると、庭を見下ろした。

静乃^{しずの}が胸の前で両手を合わせながら梯子の下から心配そうに呼びかけてきた。
「お前さま、足元にお気をつけて下さいませ」

「大丈夫だ」

妻を安心させようと答えた。

眼が眩^{くら}むほどの高さではないが、落ちると足の骨くらい折れそうだ。

透明な秋の陽射しが降り注ぎ、古い屋根瓦に柔らかな光を投げかけていた。

昨日降った雨のせいで、屋根瓦はまだ乾ききっていないかった。

浩之進は恐々と梯子から屋根に右足をかけた。足裏に屋根瓦の感触を感じながら這うようにして屋根を登り、雨漏りがしているとおぼしき場所に向かった。このところの秋雨のせいで、矢部家では以前からの雨漏りがいつそうひどくなり、とうとう昨日から雨受けの盥^{たらい}を屋敷のあちこちに置く始末だった。矢部家の者はぼたぼたという雨だれを聞きながら、一夜を過ごしたのだった。

今朝、雨が上がると、さっそく姑^{しゅうとめ}の登世^{とよ}に屋根の修繕を言いつけられた。随分と傷^{いた}んでいるな……。

古い屋根瓦は所々落ちて雑草が生えている。この前、瓦を葺^ふいたのは二十年前だという。

ぐらつく足元の瓦を踏みしめながら、ようやく一番ひどく雨漏りをしている場所に辿^{たど}り着いた。崩れかけた古い瓦を慎重に避けて屋根の具合を調べて、溜息を漏らした。

（これでは、盛大に雨漏りもするはずだ……）

素人目にも、間に合わせの修繕では無理なのは明らかだった。ずれている屋根瓦を形ばかり直すと、その場を離れた。

来た時と同じように足元を確かめながら戻る途中で左足を瓦に滑らせて、身

体の均衡を崩した。

「きゃっ」

静乃が梯子の下で、小さな悲鳴をあげた。

浩之進もひやりとしたが、何とか踏みとどまった。

その時、斜めになった屋根の上から、にゃーという猫の太い鳴き声がした。顔を上げると、大きな虎猫が棟むねから浩之進を見下ろしていた。

こいつには見覚えがあるぞ。塀の朽ちた戸板の隙間からしよっちゅう矢部家の庭に侵入してきて台所から食べ物をくすねる野良猫だった。

つい先日、夕飯の目刺しを盗んでいった。あの時、この猫を捕まえられなかったために、登世にさんざん嫌味を言われたのだ。

猫はここまででは来られまいとでも言いたげな、ふてぶてしい顔で浩之進を見下ろしている。

「このどら猫め——」

とっさに手元の瓦を掴つかんだ。猫は危険を察するや、素早く屋根の向こう側に逃げた。屋根の上では、こちらに勝ち目はない。

今度、台所で見つけたら、ただではおかぬ。

浩之進は忌々しさを堪えて梯子をかけた庇に戻ると、慎重に梯子に足をかけ、庭に下りた。

「ご苦勞様でございました、お前さま」

静乃が安堵の面持ちで迎えると、手拭を差し出しながら訊いてきた。

「屋根の具合はいかがでございましたか」

「どうもこうも、あそこまで傷んでいては、手の施しようがない」

手拭で汗を拭くと、屋根に上る際に取っていた袴の股立を下ろして、足の裏を拭きながら答えた。

「まあ、どう致しましょう」

静乃が困惑した面持ちになった。

妻の静乃は、浩之進より五歳年下の十九歳。祝言を挙げた当初は咲き初めた可憐な白い花のように初々しかった。夫婦になって三年経った今では、生来の美貌に、しっとりとした若妻の落ち着きと華やきが添えられ、白い芙蓉の花のように艶やかだった。

浩之進は三年前に、下谷御徒町の御家人の矢部家に婿に入った。妻の静乃は淑やかな美人で申し分のない妻である。舅の吉左衛門も凡庸ながら、穏やかな

人柄で無難に勤めを果たしている。

婿入り先に唯一難点があるとすれば、姑の登世が滅法気が強くて、しまり屋ということだった。舅の吉左衛門も登世の気の強いには閉口しているが、如何せん、吉左衛門も婿養子である。家付き娘の登世に逆らえなかった。

舅でさえそんな具合なのだから、浩之進が姑に頭が上がるはずがなかった。静乃の懸念を裏付けけねんけるように、座敷の奥から人の出てくる気配がした。

「雨漏りの修理はできましたか、婿どの」

登世が高飛車に声をかけてきた。

「瓦だけでなく、屋根板がずいぶん傷んでおります。屋根葺きをしませんことには、どうしようもありません」

浩之進の返事に、登世が険しい顔になった。

姑の登世は四十四歳。妻の静乃の母だけあって、面長で端正な顔立ちをしている。体つきも細身だった。しかし似通っているのは容姿だけで、気質は娘の静乃とは天と地ほどにもかけ離れていた。

「そんな金が、当家のどこにあるというのです」

登世が怒鳴った。

「なれど、義母上……」

姑の剣幕に気圧けおされながら、抗弁しようとした。そんな浩之進を睨にらみつけて、登世が言った。

「屋根の雨漏りひとつ修繕できないとは、役に立たない婿どのだこと」
雨漏りが浩之進のせいとでも言いたげだった。浩之進はかっと頭に血が上った。

「お前さま……」

側で静乃が夫の袖を引っ張って、懸命に自制を促した。その時は何とか堪えたが、登世が座敷に戻ってから、我慢していた憤懣ふんまんを妻にぶつけた。

「俺は屋根葺き職人ではないぞ。義母上は俺を下男か何かと間違えておられるのではないか」

矢部家では登世がしまり屋のために下男の一人も置いていないのだ。

「申し訳ございません」

静乃が謝っていると、不意に登世が縁側に戻ってきた。

今の言葉を聞かれたか……。

浩之進はぎくりとした。